大渕遺跡Ⅲ期に見る平安時代の土器

池　本　正　明

大渕遺跡は、海部郡甚目寺町に所在する集落遺跡で、昭和58年より、名古屋環状２号線（国道302号線）建設に伴なう事前調査として、昭和58年度より60年度まで発掘調査された他、昭和61年度には、福田川河川改修工事に伴なう発掘調査が行なわれた。(1)

1

今回注目する大渕Ⅲ期は、平安時代を中心とする時期で、前段階（大渕Ⅱ）の集落構成を整地という形で否定した後に、掘立柱建物31棟、井戸15基、土坑多数が検出されている。

検出された建物は、全て掘立柱によるものだが、規模はさほど大きなものではない。しかし、井戸等の規模には見るべきものがあり、付近に６世紀創建の甚目寺が存在する点から、これに関連付けて考える必要も存在している。出土遺物は豊富とは言い難いが、その継続年代が従来空白とも言えた時期にあたり、注目すべきものがある。

本稿は、大渕遺跡Ⅲ期に属する土器変遷のアウトラインと、ここから派生する若干の問題を考察することにより、不明確な点が多い、当地における平安時代の土器変遷を考える。

2

大渕遺跡内の良好と思われる一括資料の内容を比較すると、以下の３群に大別できる。

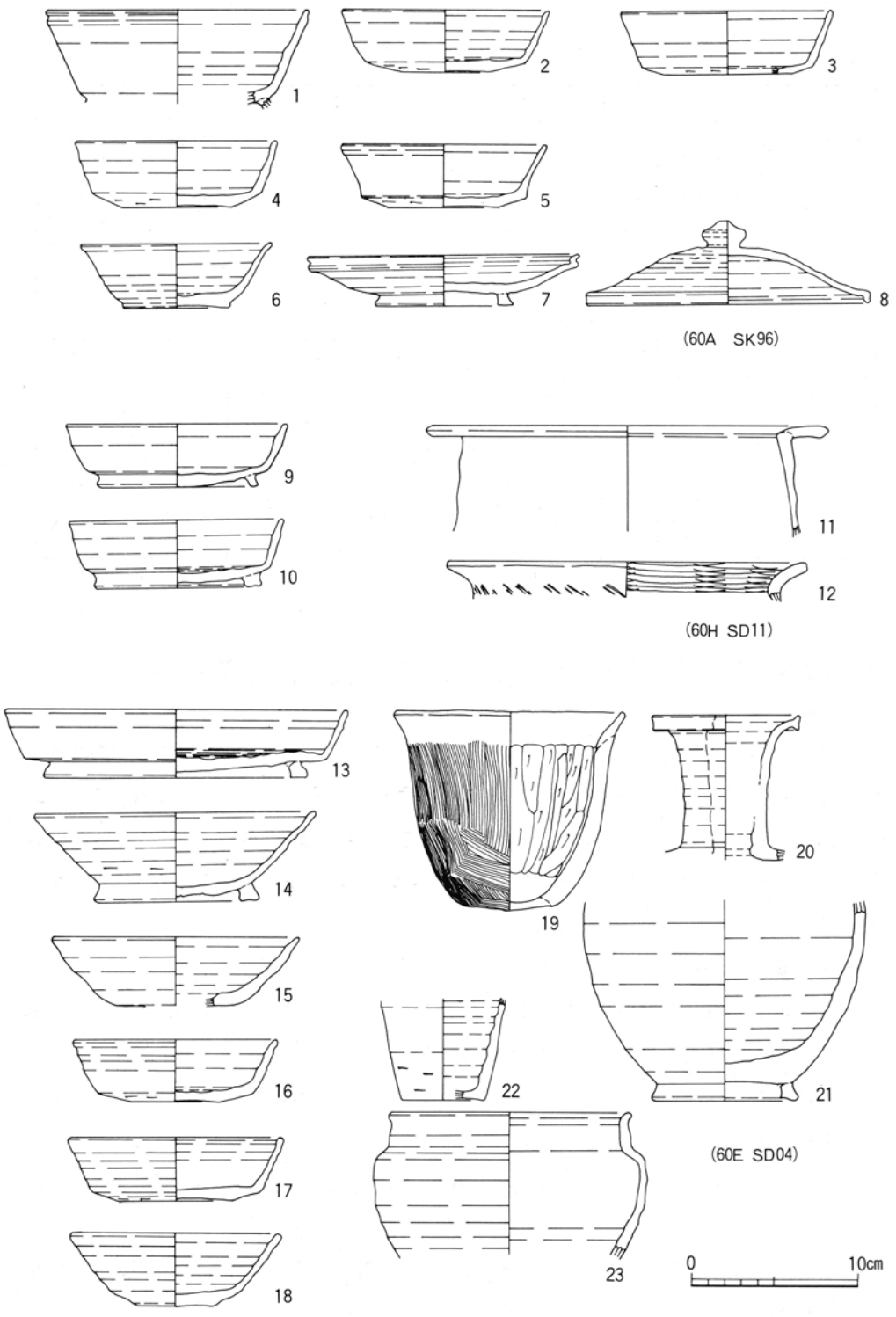
１群

１群は、60ASK96(2)出土資料を代表（第１図１～８）とするもので、供膳形態の主体が須恵器で占められている。得られた資料は、腰部で稜を持って立ち上がる有蓋杯（以下、須恵器杯Ａ類と仮称）が主体を占め（１～５）、底部より丸味を持ちながら口縁部に至る無蓋杯（以下、須恵器杯Ｂ群と仮称）が、これに加わる(6)状況である。

なお、類似する様相を持った遺溝出土資料として、60H SD11・60E SD04がある。

２群

２群は、60G SE01(3) 出土資料を代表（第２図１～４）とするもので、他に60D SE 01・60B_2SE01出土資料に類例がある。得られた資料は、供膳形態が須恵器と 古代灰釉陶器の組み合わせで構成されている。資料が量的に乏しいため、詳細は不明であるが、須恵器は杯Ａがほとんど見られず、杯Ｂが主体となっている（５～７・９・10）。 古代灰釉陶器には椀（１・７）・皿（２・11)がある。いずれも、丁寧な作りの断面が角形ないし三ヶ月形を呈する高台を有し、施釉技法はハケ塗りである。２群の、須恵器杯Ｂ類・古代灰釉陶



第１図　大渕遺跡出土遺物①（１群）

番　号	器　種	口　径	底　径	器　高	番　号	器　種	口　径	底　径	器　高
図1－1	須恵器　杯	15.6	－	(5.6)	図1－13	須恵器　杯	20.2	15.7	4.0
2	〃　〃	12.4	5.3	3.7	14	〃　〃	16.7	9.5	5.3
3	〃　〃	11.6	7.7	3.7	15	〃　〃	14.4	6.8	4.1
4	〃　〃	11.9	6.6	3.9	16	〃　〃	12.0	5.2	3.7
5	〃　〃	12.1	6.7	3.8	17	〃　〃	11.4	6.6	3.8
6	〃　〃	11.4	6.2	3.8	18	〃　〃	11.2	4.4	4.4
7	〃　盤	16.2	8.2	3.0	19	土師器　甕	13.4	4.9	12.0
8	〃　蓋	17.0	－	2.7	20	灰釉陶器　長頸瓶	8.9	－	(8.5)
9	〃　杯	13.0	9.0	3.8	21	〃　〃	－	8.5	(11.8)
10	〃　〃	12.3	9.7	4.1	22	須恵器　細頸壺	－	4.9	(6.1)
11	土師器　甕	23.2	－	(6.7)	23	〃　壺	14.2	－	(13.7)
12	〃　〃	22.3	－	(2.3)					

器など無蓋の器種がその主体を占める状況は、1群との大きな相異であろう。

3群

3群は、60E SE03[4]出土資料を代表(第3図1～5)とするもので、供膳形態の主体が、施釉技法ツケガケの古代灰釉陶器ないし、初期山茶椀[5]で占められ、これに若干の、土師器が加わる構成である。得られた資料は、古代灰釉陶器椀(1～3)・皿(4)・土師器椀(5)がある。こうした3群に見ることができる土師器は、全体数量がわずかなのに対し、椀・足高高台杯(12～14)・皿(15)と器種が多いことを指摘できる。

なお、類似する様相を持った遺構出土資料として、60E SE01がある。

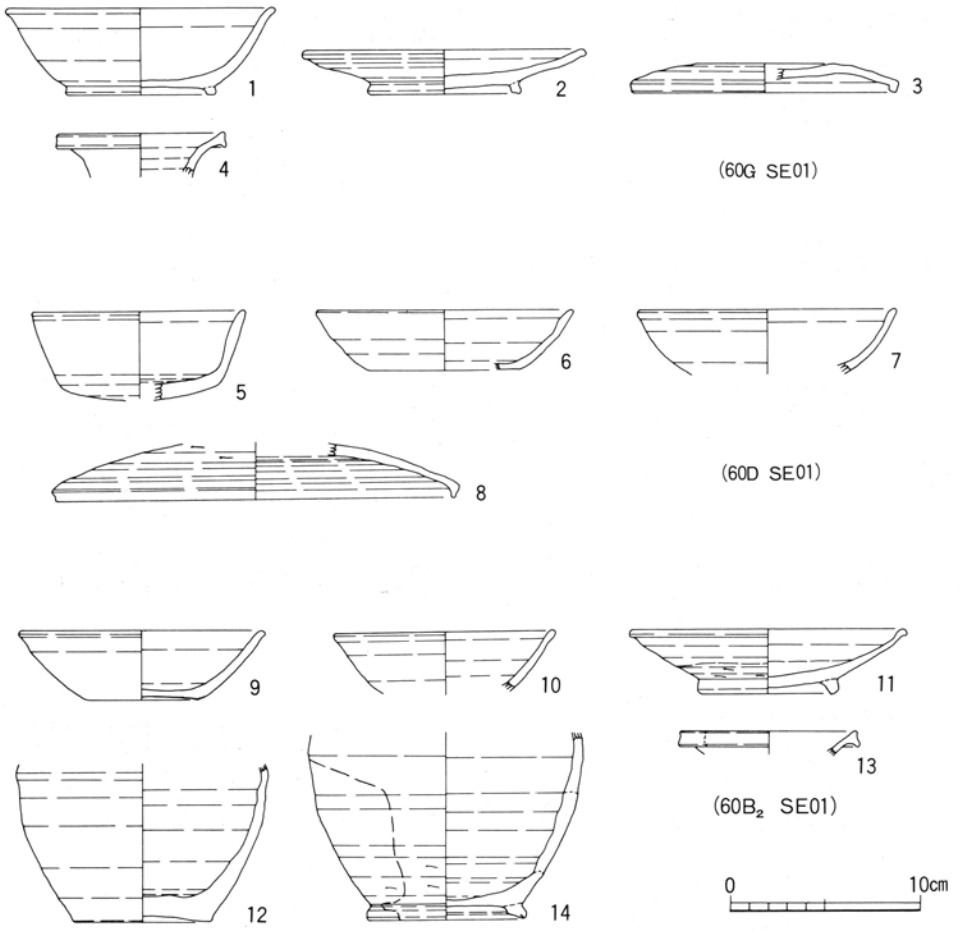
以上が、大渕Ⅲ期における一括資料の分類である。次に、これを大渕遺跡内における遺構の切り合い関係による、層位学的な見地から見ると、

1．60E区において、1群の内容を持つSD04と、3群の内容を持つSE01が切り合い、SDが古い。

2．60H区において、2群の内容を持つSEと、3群の内容を持つSKが切り合い、SEが古い。

3．60A_2区において、1群の内容を持つSKと、2群の内容を持つSKが切り合い、1群が古い。

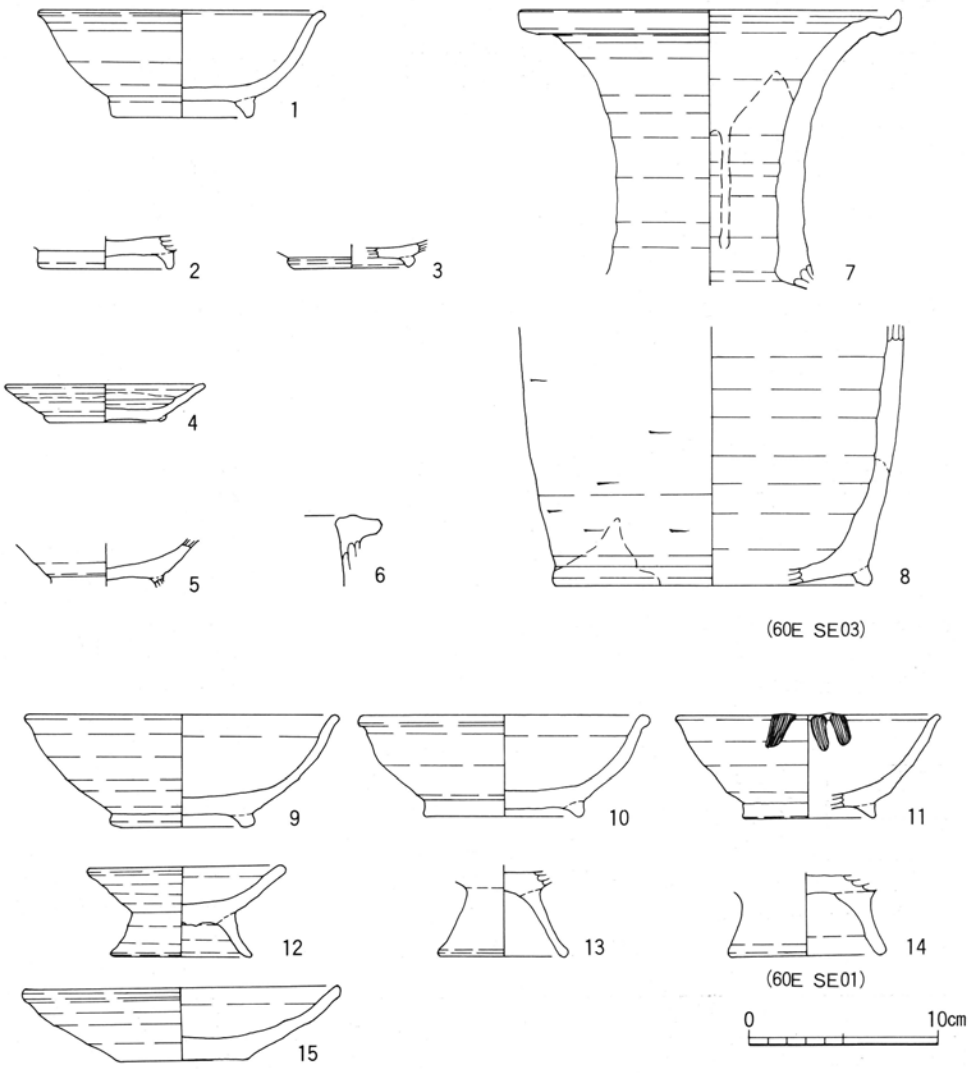
となり、1群→2群→3群と、時間的な前後関係を有している可能性が見られる。



第２図　大渕遺跡出土遺物②（２群）

番　号	器　種	口　径	底　径	器　高	番　号	器　種	口　径	底　径	器　高
図２－１	灰釉陶器　椀	14.0	7.8	4.5	図２－８	須恵器　蓋	21.0	－	（2.9）
2	〃　皿	14.6	7.9	2.3	9	〃　坏	12.7	5.6	3.6
3	須恵器　蓋	13.9	－	1.5	10	〃　〃	11.6	－	（3.2）
4	灰釉陶器　長頸瓶	8.7	－	（2.3）	11	灰釉陶器　皿	14.2	6.9	3.4
5	須恵器　坏	11.0	5.7	4.7	12	須恵器　長頸瓶	－	7.1	（8.2）
6	〃　〃	13.4	7.9	3.1	13	灰釉陶器　長頸瓶	9.2	－	（1.2）
7	灰釉陶器　椀	8.5	－	（3.4）	14	〃　〃	－	8.2	（9.7）

次に、これを検証するため、大渕遺跡内で検出されている掘立柱建物の状況と比較する。Ⅲ期の掘立柱建物は総計36棟ある。これらは、方位による規制をある程度受けており、主軸が真北より東へ30度（Ｂ類）、15度（Ｃ類）、10度（Ｄ類）と、３つに分類できる状況である。



第3図　大渕遺跡出土遺物③（3群）

番　号	器　種	口　径	底　径	器　高	番　号	器　種	口　径	底　径	器　高
図3－1	灰釉陶器　椀	14.9	6.9	5.6	図3－9	山茶碗　碗	16.1	6.4	5.9
2	〃　〃	－	6.7	(1.7)	10	灰釉陶器　椀	10.4	5.8	3.8
3	〃　〃	－	6.1	(1.3)	11	〃　〃	13.6	6.9	5.4
4	〃　段　皿	10.4	6.0	2.0	12	土師器　坏	10.2	7.2	4.7
5	土師器　椀	－	－	－	13	〃　〃	－	6.6	(4.4)
6	〃　甕	－	－	－	14	〃　〃	－	8.0	(4.3)
7	灰釉陶器　広口瓶	20.0	－	(14.5)	15	〃　皿	16.3	6.5	3.8
8	〃　〃	－	16.6	(13.5)					

これを、同一方向のものが、同一時期と仮定した場合、60H区と60F区などにおいて見られる掘立柱掘方の切り合いから、B類→C類→D類と変化がたどれることが明らかにできる。こうした変遷に、遺構の分布状況などから考えられる土器の動きを重ね合わせると、B類が1群、C類が2群、D類が3群となり、前述した遺構の切り合い関係から見た1群～3群の前後関係とよく一致する。

また、これら三群の土器様相は、例えば、図1－6と図2－6、図1－11と図3－6、図2－2・11と図3－4などに見ることができるように、型式学的に見ても、1群～3群へと技術的な年代差を有している。

従って、1群～3群の様相差を、年代による差として理解する[6]（以下、1群から順に、1期～3期と倹称し、Ⅲ－1～3と記述する。）

以上、大渕Ⅲ期の土器様相を見て来たわけだが、これらをまとめると、以下のようになろう。まず、供膳形態は、須恵器を主体とする段階（Ⅲ－1）から、古代灰釉がこれに加わる段階（Ⅲ－2）を経て、須恵器はほぼ姿を消し、代わって土師器が加わる段階（Ⅲ－3）へと変化していることが考えられる。

煮沸形態については、断片的な資料しか得られず、不明確な点が多いが、土師器甕を主体としていると思われる。ただし、甕は、Ⅲ－3期で見られる、いわゆる清郷型甕[7]を終末とし、この段階を前後して、伊勢型[8]と呼ばれる鍋に変化しているようである。

3

以上が、大渕Ⅲ期に見る平安時代の土器様相である。こうした変化は、現段階で他遺跡との比較資料に乏しいため、検証は十分にはできないが、断片的に見られる一括資料[9]と大枠での一致を見ることができ、これを一応、当地における平安時代の土器使用形態のモデルとして理解しておく。今後、同時代の資料増加を待って、遺跡内レベルから、さらに広域を見通したものを作り上げて行かなくてはならない。また、それぞれの段階は、大区

表1　猿投窯地区別古窯跡数

時　期	地区								備　考
	東山	岩崎	鳴海	有松	折戸	黒笹	井ヶ谷	瀬戸	
Ⅲ－1並行	0	6	16	3	13	24	5	0	
Ⅲ－2並行	2	20	24	6	20	43	16	0	
Ⅲ－3並行	12	0	4	5	2	3	4	12	古代灰釉陶器窯
Ⅲ－3並行	89	1	14	8	3	11	4	65	初期山茶椀窯
Ⅳ－1並行	0	32	37	50	17	56	16	158	

分として存在させたもので、さらに細分する必要を有してはいるが、現状では資料的な制約が大きく、今後の課題としておく。

この中で、今回特に注目したいのは、Ⅲ－３期に見られた土師器の存在である。従来こうした一群は、須恵器・古代灰釉陶器の有数生産地である当地域において、あまり存在がきわだったものではなかった。以下、こうした土師器について窯業生産の面から、若干の私見を述べたい。

周知のように当地域では、平安時代も終末になると、古代灰釉陶器は小器種大量生産の方向に、初期山茶椀へと変化をとげる。その動きは、スムーズなものではなく、現在知られている窯類が、この段階で減少を経て、集約増大することから見ても（表－１）[10]、大きな断絶が存在したことはまちがいはあるまい。しかし、それぞれの製品は型式学的な連続性[11]を持って展開することから、古代灰釉陶器と初期山茶椀の製作者には、大きな隔たりがあったとは考えられない。

こうした不安定な動きの中で、大渕Ⅲ－３期に見られる土師器は、窯数減少に伴なう『汁器の補完現象[12]』的に登場している。しかもこれは大渕遺跡のみに見られる特殊な状況でなく、新城市馬場遺跡１号・２号住居址[13]・稲沢市尾張国府遺跡SK131[14]・清洲町朝日西遺跡SK238・SK13[15]など並行すると思われる当地域の遺構資料にも見ることができる。しかも、それらが一部については確実に古代灰釉陶器製作者によって製作されている[16]ことは興味深いものがある。つまり、こうした状況には、古代灰釉陶器が需要に応じた形で初期山茶椀に転換するという内在された要因によるものではなく、外圧的な再編成によるものであった可能性が考えられるのである。従って、この動きの背景には、古代灰釉陶器製作者が、律令体制の影響力を完全に脱却した事実が必要であろう。

なお、この再編成が成されたと考えられる段階を時間的にあまりへだてることなく大渕Ⅲ期は終焉を迎え、その後、Ⅲ期遺構を否定する形で、全域に方格地割りが設定されている[17]（大渕Ⅵ－１期）ことは、上記の事項と同一レベルの動きとして理解し得るのではなかろうか。当地域の古代から中世への移行期を考える上で、極めて重要な事実とも理解することができると思われる。

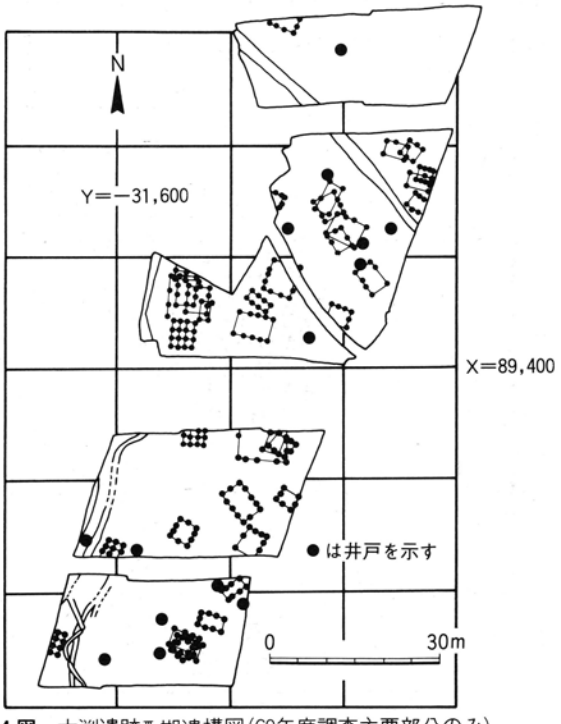
本稿を結ぶにあたり、御教示頂いた宮腰健司氏、図版作製に御協力頂いた河合明美氏に記して謝意を表します。

〔注〕

(1)　愛知県埋蔵文化財センター『年報』1986、及び本年報。

(2)　60A_1SK96は単一埋土を持つ土壙で、機能は限定できないが、埋土が単一であることから、一括（ないしはごく短期間）埋滅していることが考えられる。掲載資料は、埋土中より出土したものである。

(3)　60G SE01は、曲物を折敷上に乗せたやや特殊な内部構造を有する井戸である。掲載資料は、残存する最上段の曲物内より得られた、井戸廃絶儀礼に伴ない一括投棄されたものである。
(4)　60E SE01は内部施設を持たない（もしくは、完全に抜き取られた）井戸である。掲載資料は、埋土中より出土したものである。
(5)　ここでは、生産地において、大椀、小椀のセットで焼成されている段階と同一型式の山茶椀を指す。（名古屋市教育委員会『御影町古窯跡群発掘調査報告』1974　11頁）
(6)　西弘海「土器様式の変化とその背景」『小林行雄博士古稀記念論文集　考古学論考』1975
(7)　一宮市教育委員会「清郷遺跡」『新編一宮市史資料編４』1974
(8)　新田洋「平安時代～中世における煮炊用具 —「伊勢型」鍋 — に関する若干の覚書」『三重考古学研究１』1985
(9)　斎藤孝正「灰釉陶器の研究Ⅰ」『名古屋大学文学部研究論集XCV　史学32』1986
(10)　（楢崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』1983）に付載されている猿投窯地区別・時期別古窯数表をベースに、山茶椀窯数を加え、大渕遺跡Ⅲ期編年に型式学的に並行な窯式を書き替えた。なお、並行な窯式とは、Ⅲ－１が０－10・IG－78、Ⅲ－２がK－14・K－90、Ⅲ－３が０－53～百代寺である。
(11)　藤澤良祐「瀬戸古窯跡群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982
(12)　服部敬史「関東甲信地域による古代末期の土器様相」『神奈川考古21号』1986、なお、供膳形態を考える時、木製品の存在も想定する必要があるが、大渕Ⅲ期では現状で確認されていないことから、一応考慮しないでおく。こうした推論は、例えば60G SE01に見られる曲物のような薄い木質すら良好な状態で残存する例も認められることから、特に無謀なものではないと考える。
(13)　愛知県教育委員会「馬場遺跡」『豊川用水路関係埋蔵文化財調査報告』1967
(14)　稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅴ』1983
(15)　佐藤公保「中世土師器研究ノート(1)」『愛知県埋蔵文化財センター年報』1986
(16)　(9)39頁
(17)　池本正明「大渕遺跡に見る中世集落の一形態」『愛知県埋蔵文化財センター年報』1986



第４図　大渕遺跡Ⅲ期遺構図(60年度調査主要部分のみ)